

令和 3 年度  
福島県 集落自主活動に係る伴走支援事業

喜多方市高郷町本村地区業務実施報告書

獨協大学ほんそんみらいプロジェクト

## 目次]

1. はじめに	1
2. 喜多方市高郷町本村地区の概要	2
3. 事業活動報告	2
3-1. 現地活動	2
3-2. オンライン活動	4
3-3. “Earth Week Dokkyo 2021 ~Winter~”における地域振興物産展の開催	6
4. 次年度の活動提案	7
4-1. 現地での活動の場合	7
4-2. オンラインでの活動の場合	8
5. おわりに	9

### 1. はじめに

獨協大学地域活性化プロジェクト大坪チームは2018年度に「大学生の力を活用した集落復興支援事業」に採択されて福島県高郷町本村地区において活動を開始した。2020年度は獨協大学ほんそんみらいプロジェクトとして「大学生等による地域創生推進事業」に採択され、4年目となる今年度は「大学生等による地域創生推進事業」が「集落自主活動に係る伴走支援事業」に衣替えして、次年度の「地域創生総合支援事業(サポート事業\_過疎・中山間地域活性化枠(集落等活性化事業)」への申請を目指すことになった。

1年目の2018年度は実態調査として学生グループが実際に集落に足を運び、集落が抱える課題に対して企画提案をした。2年目の2019年度は実証実験として前年度に企画提案したフットパスツアーを試験的に実施した。3年目の2020年度に団体名を「獨協大学ほんそんみらいプロジェクト」に変更し、主にオンラインで集落との交流を継続した。

4年目の2021年度メンバーは、宮本圭(代表：国際環境経済学科4年)、小山健司(副代表：経営学科3年)、飯田佳暖(会計：フランス語学科4年)、久保華央(会計：ドイツ語学科3年)、堀田唯茉(経営学科3年)、白井里奈(国際環境経済学科3年)、緑川舞(国際環境経済学科3年)、篠崎富貴(国際関係法学科3年)、猪爪麻衣子(フランス語学科卒)、窪谷ちひろ(英語学科卒)、清野芽生(フランス語学科卒)の5学科8名と卒業生3名である。

今年度は新型コロナウイルス感染拡大に伴う緊急事態宣言が9月末によりやく解除され、10月に担当教員が副学長、学長に折衝して、現地活動が認められた。これにより、11月13日(土)・14日(日)には初の現地活動を行った他、9月と12月にはオンラインによる講演会や交流会に参加するなど、現地活動とオンライン活動のハイブリッドで活動した。さらに、本学で開催された「獨協大学環境週間“Earth Week Dokkyo 2021 ~Winter~”」に参加し、12月7日(火)から10日(金)に地域振興応援物産展を開催した。以下に、本年度の活動実績について報告し、次年度の活動計画について報告する。

## 2. 喜多方市高郷町本村地区の概要

本村地区は福島県の北西部、会津盆地の北側に位置し、喜多方駅から16km、車で約30分の場所にある。人口41人、世帯数14世帯、高齢化率は50%で、地区の2人に1人が60歳以上である。また、集落の標高は約300mで、一級河川の深山川沿いに集落が密集している。地区の主要産業は農業で、主に稲作やそばの生産が盛んである。加えて斜面が多い山間地に集落があるため、集落には棚田が多く見られる。

本村地区は高郷町の行政区の1つであった。しかし、高郷村は2006年に喜多方市、熱塩加納村、塩川町、山都町と合併して新しく喜多方市として発足されたことをきっかけに、新たに高郷町となった<sup>1</sup>。本村地区は人口が少なく高齢化率が高いため、抱えている課題も多くある。例えば、人口が少ないため、1世帯当たりの村の維持コストの負担が増えたり、市町村合併による行政支援が縮小したりなどが挙げられる。また、集落の半分以上を高齢者が占めているため、働き世代が少なく、労働者不足や耕作放棄地の増加などの問題も生じている。そして、新型コロナウイルスが流行してからは集落で毎年開催してきた行事や大勢で集まって会話をすることも難しくなってしまう、住民同士のコミュニケーション機会も失われつつある。

## 3. 事業活動報告

### 3-1. 現地活動

私たちは2021年11月13日(土)・14日(日)に現地活動を行った。詳しい活動スケジュールは以下の通りである。

図表 1. 現地活動行程表

日付	時間	活動内容
11月13日(土)	09:00	バス新宿 出発
	15:29	会津若松駅 到着
	15:30	会津若松駅 出発
	16:20	本村到着
	16:30	本年度の打ち合わせ 自己紹介
	17:00	物江さん宅到着 夕食準備
	18:00	夕食片付け
	18:20	ふれあいランド高郷
	20:00	ミーティング
	22:00	就寝
	11月14日(日)	06:00
07:00		朝食
08:00		フットパスコース整備

<sup>1</sup> 喜多方市ホームページ(以下の URL)を参照。  
(<https://www.city.kitakata.fukushima.jp/site/10th/>)

12:00	昼食 後片付け
13:30	フットパスコース整備の続き、次回の現地調査に向けてのミーティング
16:00	本村 出発
17:00	会津若松駅 出発
21:44	バスタ新宿 到着

現地活動は、昨年度新型コロナウイルスの影響で一度も現地に行くことができなかったため、約1年ぶりとなった。現地活動を行うにあたって、新型コロナウイルス対策のガイドラインを作成し、できる限り少人数での現地訪問にするために、今回は宮本、小山、白井、堀田の4名が参加した。また、現地活動を終えてから2週間はメンバー全員大学指定の体調観察表と行動記録表を記入するなど万全な対策をし、現地活動に入った。

行き的高速バスで渋滞にはまったため時間が押してしまい、株式会社クノウさん、喜多方市役所地域振興課の猪俣健次さん、高郷町住民コーディネーターとの打ち合わせには短い時間での参加となってしまった。打ち合わせでは、対面での顔合わせが初めてのメンバーが多かったため、自己紹介から入り顔合わせを行なった。打ち合わせでは次年度以降どのような活動をしていくか、どのようにして関係人口の構築を図るかなどを話し合った。短時間での参加であったが、住民の方たちの地域に対する想いが伝わり、自分たち学生もそれに応えられるように今後も活動していきたいと感じる良い機会となった。

2日目には、フットパスコースに設置予定の看板制作を行った。当日は、福島民報社の記者の方に来て、看板制作の様子や私たちの活動について取材を受けた。その記事が後日新聞に掲載された。

写真 1. 看板制作の様子



写真 2. フットパスコースの整備



また、フットパスコースに設置予定の看板制作を終えたあとは、新しいフットパスコースの整備と制作した看板の設置を行った。フットパスコースの整備では、普段から自然と向き合っている地区の方たちに圧倒された。フットパスコースの中には足場が不安定な場所もあったが、一緒にコースを歩いた地区の方々に支えられ、無事に看板を設置することができた。コース内の足場が不安定な場所や傾斜が厳しい場所をどうすれば安全に歩くことができるかが今後の課題である。

今年度の現地調査は新型コロナウイルス感染症対策から少人数での参加となり、参加できないメンバーもあり、現地活動も1回で終わってしまった。そのため、次年度は感染症対策をしっかりと行いながら、今回参加出来なかったメンバーも含め複数回現地活動に参加できるように調整していきたい。

### 3-2. オンライン活動

#### (1)徳島大学田口太郎先生による本村集落講演会

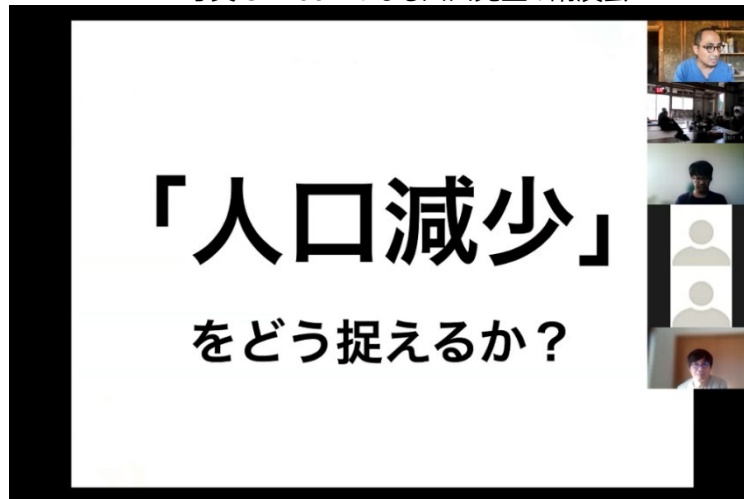
図表 2. 徳島大学田口太郎先生による本村集落講演会

活動日	9月23日(木)14:00～
参加者	現地9人、株式会社クノウ2人、教員:米山先生 学生:宮本・飯田・猪爪(OG)・窪谷(OG)・清野(OG)
活動内容	徳島大学准教授田口太郎先生による講演会 演題「5年先、10年先を見据えて地域の方向性を考える」

私たちは9月23日に徳島大学准教授であり、そして地域おこし協力隊の人材育成にも携わる田口太郎先生による講演会に参加した。本村の現状・抱える課題や、今後住民の方との関わり方について、先生自身の経験を踏まえて細かく分析し、非常に分かりやすく説明してくださった。

先生は、集落の人口が減少したり高齢化が進行したりすることで集落が衰退することを集落の自治力の低下と述べていた。過疎化によって衰退した自治力をどう回復するかということで、「移住」による担い手の獲得によって自治力を再生させると述べる。担い手とは必ずしもその集落に住むものでなければいけないわけではない。例を挙げると獨協大学の学生のような外から集落を思ってくれるような存在も担い手として共に集落を支えていくことができるという。こうした外部との関わりが集落の衰退局面の打開やきっかけになると述べる。私たちはこのお話を聞いて、大学生という若い力が集落に入ること、外部の人間が集落内と関わりを持つことが集落の自治力の再生や活性化において強い意味を持つことを実感した。私たちが積極的に集落に関わろうとすること、また、集落から今後も関わっていきたいと思ってもらえること、そして集落を思う人たちのネットワークを拡大させることが大事なのではないかと感じた。

写真 3. Zoom による田口先生の講演会



(2)株式会社クノウと本村地区共同開催の「いなかと♡いいなかオンライン交流イベント」

図表 2. 株式会社クノウと本村地区共同開催の「いなかと♡いいなかオンライン交流イベント」

活動日	12月20日(月)19:00~20:00
参加者	現地の方:区長貝沼邦博さん、前区長物江浩二さん 学生:宮本
活動内容	いなかと♡いいなかオンライン交流イベント

私たちは12月20日に「いなかと♡いいなかオンライン交流イベント」に参加した。当イベントは、株式会社クノウと本村地区の共同開催によるもので、Zoomにて行われた。株式会社クノウとは福島県の地域活性化のために広告という手法を用いて地域活性化のための協力をしている企業である。

イベントには学生や集落の住民の方々以外にも一般の方々の参加もあった。イベントでは本村地区の現状や抱えてる問題、またそれらに対してこれからどういった活動をして集落を活性化させていこうと考えているかなどスライドを用いて説明してもらった。集落の説明だけではなく、参加者と集落住民の方、または参加者同士で話し合ったり、質問をし合ったりする機会も設けられていた。参加者の中には本村地区にとっても興味をもち、行ってみたいと感じたと言う方もおり、嬉しく感じた。今のように気軽に現地に行って交流ができない環境下では、オンラインによる人と人の繋がり創出はとても貴重であると感じた。また、オンラインでのイベントは参加者を幅広く募集できたり、記録を残せたりする点などメリットも多くあるため、次年度以降もオンラインでの交流の幅を広げていきたい。

3-3. “Earth Week Dokkyo 2021 ~Winter~”における地域振興物産展の開催

図表 3. “Earth Week Dokkyo 2021 ~Winter~”における地域振興物産展の開催

活動概要	高郷町産のそば粉を使用した手作り蒸しパンの販売と本村の PR 商品は蒸しパン(プレーン、チョコレート)のみ、100 円で販売
結果 (売れた個数)	12月7日：プレーン5個、チョコレート3個 12月8日：プレーン9個、チョコレート7個(完売) 12月9日：プレーン5個、チョコレート13個(完売) 12月10日：プレーン6個、チョコレート10個
改善点	・価格設定の見直し ・本村 PRリーフレットの配布 ・販売する商品の種類を増やす

「獨協大学環境週間“Earth Week Dokkyo 2021”」とは、本学で6月と12月の年に2回開催されるイベントで、「環境と開発を両立させて、持続可能な社会を創る」というテーマに沿って、参加団体を募集して参加団体が企画を実施するという本学の公式イベントである。今年度12月6日～11日に開催された「獨協大学環境週間“Earth Week Dokkyo 2021 ~Winter~”」において、「大学生と集落の協働による集落復興支援事業」で活動する4グループが合同で「地域振興応援物産展」を開催し(写真4)、私たちは12月7日(火)～10日(金)において本村の特産物の1つであるそば粉を使用した手作り蒸しパン(写真5)を製作し、販売した。

写真 4. 地域振興応援物産展の様子



写真 5. そば風味蒸しパン



大学付近のマンションにポスティングした効果が出て、学生だけでなく学外から足を運んでくださった方もいた。販売する商品を蒸しパンに選んだ理由は、そばの風味をしっかりと感じることができること、簡単な調理で作ることができること、また多くの人が手に取りやすいものにしたかったからである。私たちのブースで足を止めてくださった方や購入してくださった方には簡潔に本村についてお話したが、説明に際してはリーフレットを用意しておくとうよかった。次年度はリーフレットを事前に作成しておいてそれを渡すようにした方が、より効果的に本村のPRをすることができるので、次年度出店する際にはリーフレ

ットの作成も忘れず行いたい。

また価格設定が、多くの方に購入してもらうことを最優先にした結果赤字になってしまったため、きちんと利益が出るような価格設定になるよう綿密に話し合う必要があった。出品した商品の種類も他のチームと比較すると非常に少なかったため、蒸しパンの他にも特産物を使用したレシピを考案しなければならないと考える。今回物産展に参加し、多くの改善点が挙げられたため次回参加する際はこれらの改善点を全て解決し、より良い物産展にできるようにしたい。

#### 4. 次年度の活動提案

第2節でも述べたように本村地区は過疎化や高齢化によって労働者不足や耕作放棄地の増加などさまざまな課題を抱えていることがわかる。しかし、その反面、豊かな自然資源があること、その自然資源の魅力を最大限に感じられるフットパスを体験できること、外部の人たちを拒まず温かく受け入れてくれる住民の方々がいることなどたくさんの魅力にあふれているのも本村地区の特徴である。そんな本村地区を集落の方々と一緒に支えていきたいと考え、令和3年度に引き続き、令和4年度の「地域創生総合支援事業(サポート事業)」の過疎・中山間地域活性化枠(集落等活性化事業)に申請した。以下では次年度のサポート事業の事業計画を簡潔に表にまとめる。

図表 4. 地域創生総合支援事業(サポート事業)申請事業「いなかといいなか交流事業」

事業名	いなかといいなか交流事業
事業概要	・「いなかといいなかフットパス事業」 ・フットパス事業の付加価値を高める関連事業に取り組む ・フットパスに取り組む自治体の視察研修 ・全体事業計画、年度事業計画の策定、組織の構築

本節では次年度の活動が現地活動の場合とオンライン活動の場合で分けて、私たち獨協大学ほんそんみらいプロジェクトが本村地区のサポート事業にどう協力していくかを示す。

##### 4-1. 現地での活動の場合

###### ①「フットパス×村のお助けイベント」の定期開催

現在集落の方々と、LINE 電話や Zoom を通じて、本村の良さを外部へ発信していこうとということで、「いなかといいなか」というキャッチコピーをもとに議論を重ねている。先日も、「いなかといいなか」オンライン交流イベントを開催し、どうしたら本村地区の魅力を外部の人に伝えることができるかを話し合った。そうした活動を通して感じたことをもとに、次年度は「フットパス×村のお助けイベント」の開催を提案する。下の表が「フットパス×村のお助けイベント」の例であるが、フットパスだけでなく、豊かな自然を生かした料理を作ったり、都会ではなかなか見ることのできない蛍の見学をしたりなど、それぞれ季



節に合わせたイベントを盛り込むことで、参加してくれた人に本村の魅力がよりたくさん伝わるようにする。オンライン交流イベントや獨協大学内での催し事などでこのイベントの広報をし、福島県の人だけではなく獨協大学の学生や職員なども巻き込んで外部の人を呼び込んでいきたい。

図表 5. 「フットパス×村のお助けイベント」例

5月	フットパス×農道の砂利引き、花見、山菜料理
7月	フットパス×用水路の草刈り、川遊び、蛍見学
11月	フットパス×収穫感謝祭、ボブスレー、地元野菜の鍋

## ②フットパスコースのマップ作成

今年度、フットパスコースの整備を行ったが、本村区長をはじめとして集落の方々にほとんどの整備を頼ってしまった。魅力のあるフットパスコースにするには、集落の方の意見も大事だが、学生の意見も重要となる。例えば、改善点として「歩きづらい所の近くには縄を常備しておく」などが挙げられる。実際の体感として、集落の人々は普通に通行できていたが、私たちからすると歩きづらいと感じる場所がいくつもあった。また「紅葉スポットには目印となる看板を設置する」なども重要だろう。普段は集落にいない学生が多く意見を出すことで、新たな発見が生まれると考えている。

こうした経験を踏まえ、フットパスコース内における「紅葉の綺麗な場所」を、写真を交えて紹介することや、「歩きづらい or 獣が出るなどの危険な場所」を予告するような紹介を加えながら、マップを作成したい。

フットパスに関する発信方法に関しては、InstagramやTwitterなどのSNSを活用していきたい。11月現地視察へ行った際に区長の貝沼邦博氏が、今後は集落の魅力をSNSで積極的に発信していきたいと仰っていた。SNSでの発信は普段から頻繁に使用している大学生のほうが慣れているので、どうしたら見栄えよく投稿できるかなどを一緒に考えながら、有効に現地の情報を発信していきたい。

## 4-2. オンラインでの活動の場合

今年度同様、新型コロナウイルスの影響により現地での活動が困難になってしまった場合、私たちはオンライン上で活動を進めていく。今年度、学生同士や学生と集落間でのオンラインミーティングにおいて、活動の話だけではなく、近況などたわいもない話を互いに話し合い、学生同士、学生と集落間のコミュニケーションを円滑にすることができた。状況に応じてZoomやLINE、テレビ電話を用いながらミーティングをしてきたが、数こそは多かったものの不定期であった。また参加者は、在校生やOGの方々、本村区長のほか本村集落の方々であったが毎回の参加者は異なっていた。そのため次年度は事前に参加の有無についてアンケートをとりながら、各週定期的にミーティングを行っていきたい。そして今年度は、

オンライン上で「徳島大学田口太郎先生による本村集落講演会」や「株式会社クノウと本村地区共同開催の『いなかと♡いいなかオンライン交流イベント』」があり、次年度においてもミーティングだけではなく講演会やイベントに積極的に出席し、活動をしていきたい。これらのことから、オンライン上の活動では今年度以上に交流を深め、より学生と集落の関係が深められるよう努力していきたい。

## 5. おわりに

今年度は事業開始から 4 年目となり、昨年度に引き続き福島県の皆様、大学の職員の皆様、先生方のご協力のもと活動することができた。新型コロナウイルスの影響が続く中で出来ることを模索しながらの活動となった。

昨年度は全面オンラインでの活動だったが、今年度は現地とオンラインのハイブリッドで活動を行った。オンラインでの講演会、交流会や Zoom でのミーティングは場所を選ばないため比較的スケジュール調整がしやすかったり、LINE 電話で集落の方と活動のことだけでなく近況報告などを話したりと、オンラインでのメリットは多い。しかし、現地に足を運び直接現地の方々と交流することで初めて感じるものがあるのではないかと考えている。まだ現地に行ったことがないメンバーもいるため、感染状況にもよるが次年度は今年度より 1 回でも多く現地での活動を行いたい。

次年度以降の課題として挙げられるのは、活動の継承とメンバー 1 人ひとりが活動の意義を考えることだと思う。前述の通り現メンバーには現地での活動経験がある人とない人がいる。活動経験がない人にとっては活動の意義を実感するのが難しかったり具体的な活動のイメージがなかったりする。もちろん現地に行けるのが一番良いのだが、学生間のミーティングを通してメンバー全員が同じ方向を向いて活動に積極的に参加できるように努力していきたい。また、この 1 年間在学生や OB・OG の方々と集落の方々との間に強い信頼関係があると感じる場面が多くあった。未だ見通しが立たない世の中ではあるが、築いてきた信頼関係を途切れさせることなくより強いものにし、今後の活動を行っていききたいと思う。

結びになりますが、このような学びの機会を与えてくださった福島県の皆様、活動を支援してくださった全ての方に心より御礼申し上げます。